

福 八

語り手…渡部 松市さん(菱浦、明治28年生まれ)

昔、殿様のとこに入りの福八ちゅう男があつただの。ま、話のよう話す、出入りの福八が話すだけん、

「ま、今日はさもしい(寂しい)けん、福八を呼んで話を聞かあや」て言って、「おお、そらいい、なあ」。殿様が言って、

「の、福八呼んで来いな」

そか、下のもんに呼んで来させて、

「ああ、殿様、何でございますか」言って、

「ええ、何てて、まあ、あんまりさもしいだけん、おまえが話聞かあと思つて。また、今日もふとつ話さんか」言って。

「ああ、殿様、話すはいいだいどけ、わしゃ、ま、やめた」

「なあせ、やめつだ」

「ま、わしが言ったことは、嘘だらが。嘘だらあ。け、話^{はね}たててけ、弾みがない。今度、殿様、あんたがわしが話いたこと、嘘だ^{こんだ}がや、言ったてや、あんた、褒美^{褒美}ごすかの、そいつを楽しみに話すだ」言った。

「そな、ふとつ、褒美やっけん話せな」

「そんなら、話しましょうかなあ」言って、そから、

「昔の、広っぱの野原に毛氈^{モーシ}を敷いて、芸者を呼んでチェンチェ、チェンチェコにぎやかでした」

「お、そげな話か。いい話だな」

「け、殿様のおつもりさん(※頭のこと)が、け、前へポロッと落ちてきて…」

「ええ、嘘だらや」ちえつて、殿様が言つたら、け、福八が勝つてね、褒美をもらった、という話だつた。

■収録／昭和50年11月28日／福原隆正・池田百合香・小新恵子

 隠岐島前高校郷土部収録
 海士町の民話から(21)

■再話・解説

 酒井 董美^{たかよし}

 (山陰民俗学会会長、
元隠岐島前高校郷土部顧問)

イラスト／福本隆男(崎出身、三郷市在住イラストレーター)



【解説】 関 敬吾『日本昔話大成』でこの話の戸籍を調べると、「笑話」の「三 巧智譚」の中にある「A 業較べ」の項目「嘘の名人」が関係ありそうである。そこには以下のように紹介されている。

話の聞き手が「そんなことはない」といったら、語り手に米一俵やる約束をする。(a) 殿様の頭に鳶が糞をしたので首をすげかえた。(b) 蛇が自分の尻尾から食って頭だけ残る。(c) 桐の茶釜で湯を沸かす。聞き手がそんなことはないといったので負ける。(そんなことはないともいう)。

渡部さんの語りは、確かにこの系統を引く話であることは、どなたも異論はないと思う。隠岐島前高校郷土部がスタートした年に収録できた話である。

なお、「福八」という名前は、他の地方で「彦一」とか「彦八」「吉四六」などと名付けられているおどけ者の系統を引くものであろうと推定される。